

シャンソン研究会会報 No.36

11月19日(土)に信州大学人文学部において3年ぶりに対面で第36回シャンソン研究会を開催いたしました。昨年6月にzoomによるオンラインでの研究会を行いました、久しぶりの対面式の研究会ということもあって、参集されたみなさんはやはりこの機会を心待ちにされていたようです。長野日仏協会の会員の方や、仏文や比文の学生さんや当方が今年開講している教養科目「シャンソン文化史」を受講している教育学部の1年生、あるいは最近入会された高校生など、一般の人も含めて老若男女30名ほどの参加者があり、各発表に対する質疑応答も活発に行われ盛会裡に終えることができました。依然としてコロナ感染は収まる気配がなく、懇親会を開くことができませんでしたが、会員のみなさんは再会を喜び合い久闊を叙しておられました。当日のプログラムは以下のとおりです。

(研究会代表 吉田正明)

プログラム

【代表挨拶】 14:00～14:10

【研究発表】

1) 14:10～15:00

発表者：高岡優希（大阪大学非常勤講師）

題 目：「ポール・エコール Paul École—カロジェロたちトップスターを支える現代シャンソンの新しき語り部」

司会者：鈴木球子（信州大学講師）

休憩（15:00～15:10）

2) 15:10～16:00

発表者：村田京子（大阪府立大学名誉教授）

題 目：「19世紀フランスの歌姫ポリヌ・ヴィアルド」

司会者：青柳りさ（金沢美術工芸大学教授）

休憩（16:00～16:10）

3) 16:10～17:00

発表者：本間千尋（東京藝術大学教育研究助手）

題 目：「シャンソンにおける疫病と噂—1832年パリの場合—」

司会者：吉田正明（信州大学教授）

発表要旨

1) ポール・エコール Paul École

ー カロジェロたちトップスターを支える現代シャンソンの新しき語り部 ー

高岡優希

通常、フランス人が重視し注目するのは、いわゆるシンガーソングライター、詩を書き、曲をつけ、自ら歌う人 *auteur-compositeur-interprète* と呼ばれる人たちである。トレネ、ブレル、バルバラ、ゲンズブールたちの名は、今も色褪せない。しかし今、その優れた歌詞が大いに注目され、数々のトップスターたちの歌を支えている若き作詞家がいる。ポール・エコール、パリ生まれブルターニュ在住の30代と思しき音楽家である。名前も偽名であるが、その本名及び生年月日などは明らかにしていないようである。以前は自ら舞台上で歌っていたようであるが、歌手として脚光を浴びたわけではなかった。しかし、2014年カロジェロ Calogero との仕事の機に、作詞家として活躍中である。カロジェロのみならず、クリストフ・マエ Christophe Maë, パトリック・ブリュエル Patrick Bruel, フロラン・パニー Florent Pagny とトップスターたちがこぞって彼の歌詞を求めている。

なぜここまで彼が重用されているのか。今回の発表は、ポール・エコールの魅力を探るべくその作品を、特にカロジェロやクリストフ・マエのために書かれた曲を中心に7点を紹介した。

1. 「花火 *Les feux d'artifice*」 2014 Calogero
2. 「月の明かりに *Au clair de la lune*」 2014 Calogero
3. 「幸せはどこ *Il est où, le bonheur*」 Christophe Maë 2016
4. 「1987年 *1987*」 1987 Calogero 2017
5. 「僕らの根っこ *Fondamental*」 Calogero 2017
6. 「人々 *Les gens*」 Christophe Maë 2019
7. 「緑のペン *Stylo vert*」 Calogero 2020

その魅力はまず何よりも、心の琴線に触れるような際立つ抒情性があげられよう。初めて花火を見た少年の感動、その瑞々しさ、貧しい移民家族の心の交流、しかしそれだけではなく彼は、ゲンズブール顔負けの、知的興味を刺激される巧みな言葉遊び、音遊び、また数多くの作品を引き合いに出す教養の深さも持ち合わせている。そして、曲をヒットに導くための大衆性も持ち合わせ、また描写の細かさや具体性、それが聴く者に、くっきりと歌詞の世界

を思い描かせる。様々な可能性を見せてくれる作詞家である。

そして彼にとっても歌はメロディーが付いて、歌われて初めて人の耳に届く。歌詞を存分に活かす旋律や声を持った優れた歌手たちと出会えたことは、彼にとって大きな福音であろう。

彼は2017年、1年前の花火会場でのテロによる犠牲者の追悼式で、カロジェロによって歌われた「花火」を聴いた時、自分の作品が自分の手を離れ、別物になったと語っている。歌詞が歌われる時、書き手の意図を超える — それが歌であり、舞台の威力であり魅力であろう。

エコールの夢は、アラン・スーションやロラン・ヴルズィのためにいつか歌を書くことができれば、ということだそうである。これから益々、フランスシャンソン界を面白くしてくれる若い作詞家に期待している。

参考音源

Calogero	2014 « Les feux d'artifice », Polydor, un label Universal Music France.
Christophe Maë	2016 « Atrappe-Rêves » Warner Music France
Calogero	2017 « Liberté chérie » Polydor, un label Universal Music France.
Patrick Bruel	2019 « Ce soir on sort... » Columbia
Christophe Maë	2019 « La vie d'artiste » Warner Music France
Calogero	2020 « Centre ville » Polydor, un label Universal Music France.
Julien Clerc	2021 « Terrien » Warner Music France
Florent Pagny	2021 « L'avenir » Universal Music France

2) 19 世紀フランスの歌姫ポリヌ・ヴィアルド

村田京子

ポリヌ・ヴィアルド (1821-1910) は、本国フランスに留まらず、ヨーロッパ中の人々から熱狂的に迎えられ、その歌唱力を高く評価されたオペラ歌手であるが、日本では殆ど知られていない。本発表では、彼女がどのような歌手であったのか、その生涯を辿った。

ポリヌの家族は両親ともオペラ歌手で、とりわけ姉のマリア (ラ・マリブラン) はメゾソプラノ歌手の才能を発揮し、ロマン派のディーヴァとしてもはやされた。しかし、28 歳の若さで亡くなったため、ポリヌは「第二のラ・マリブラン」として 1837 年にオペラ歌手デビューをする。姉と同じ声域、才能を持つ彼女は称賛の的になるが、1840 年に共和主義者ルイ・ヴィアルドと結婚してからは、政治的理由で新聞・雑誌の劇評で酷評される。彼女はヨーロッパ巡業を余儀なくされるが、各国でその歌唱力、演技が高く評価され、名声が広まる。

彼女がパリのオペラ座の舞台に立てたのは、マイヤベーアの《預言者》(1849) において、フィデス役で一世を風靡する。それは、「母親という役柄で女声の低声パートに主要な役割が与えられて」成功した画期的なオペラであった。《預言者》は民衆が蜂起した 1848 年の二月革命の後に上演され、ポリヌは「革命の動乱における民衆の女、民衆の母」として力強い女性像を作り上げた。彼女の若い頃からその才能を認め、親しく交際してきたジョルジュ・サンドは、彼女に「マルセイエーズ」に代わる新しい国歌を作曲するよう依頼する。ポリヌは「若き共和国」というタイトルの曲を作るが、あまり高い評価は得られなかった。

二月革命の後、急進左派によるクーデタが失敗し、労働者たちの反乱も弾圧されて夫のルイやサンドが目指した理想の共和国の夢が消え去り、彼らは危険分子扱いされる。ポリヌは再び外国巡業を余儀なくされ、パリの舞台に再び咲くのは 1859 年のグルックの《オルフェ》(ベルリオーズ編曲) によってであった。彼女はオルフェ役を見事に演じ、歌・演技・作曲・造形芸術という様々な次元で才能を発揮し、絶賛される。しかし、40 歳を越えて声の衰えを感じ、1863 年に《オルフェ》の最終公演を行った後、バーデン・バーデンに移住し、音楽教師としての活動を始める。1870 年の普仏戦争の勃発でドイツを去らざるを得なくなり、1871 年にパリに戻り、1910 年に 88 歳で亡くなるまで後進の歌手の育成に努めた。

ポリヌの交友関係は幅広く、リスト、ショパン、クララ・シューマン、グノー、ワーグ

ナーなど音楽家、ドラクロワなど画家、サンドの他にもツルゲーネフ（40 年以上にわたって親しく交流）、フロベール、ディケンズ、ゾラなど作家や、各国の国王やビスマルクなど政治家とも交流があった。一方で、サンドの要請でベリー地方の農民の民謡やフォークロアの歌詞とメロディを収集し、音譜に残すなど、民俗学的役割も果たしていた。その意味では彼女は、ブルジョワ的なオペラと庶民的なシャンソンの橋渡し役を務めたと言えよう。

3) シャンソンにおける疫病と噂—1832 年パリの場合—

本間千尋

2020 年に新型コロナウイルスが世界中に広まった際、様々な混乱やデマが蔓延し、それを歌う者まで登場した。このような疫病による噂や不確定な情報の流布、それを象徴する歌はどの時代にも登場しえたのだろうか。本発表では、コレラが流行した 1832 年のパリをその一つの事例として考察した。

パリ市らがまとめた公式報告によれば、市内で最初のコレラ感染者が確認されたのは 1832 年 3 月 26 日のことである。その後わずか 18 日間で急速に広まり、12000 から 13000 名の罹患者と 7000 名の死者が報告された。こうした感染者の急速な増加と高い致死率は人々を恐怖に陥れ、J. レギオンは「まだ死にたくない」などとその心情を率直に歌った。

ハイネらによれば、このころ、彼らの症状を意図的に混入された毒によるとする噂が広まった。コレラと砒素中毒の症状が類似しているだけでなく、7 月革命から 2 年足らずという政情も相まって、毒殺を政府の陰謀とする噂まで登場したという。警視総監ジスケは注意喚起のため回状を發布したが、それがかえって噂の存在を公にしてしまう。その結果、怪しい素振りの者を「毒殺者」とみなし、暴力沙汰を起こす市民まで現れた。当時の新聞（『コンスティテュションネル』）には「〔犯人を〕街灯へ吊るせ！ *Ala lanterne !*」と叫ぶ者の存在が報じられた。これはフランス大革命期に流行したシャンソン『サ・イラ *Ça ira*』の一節であり、ハイネが言うところの「古い有名な叫び」である。

さらに、特効薬とされた物品の価格が上昇する。「マジャンディのパンチ」というホット

ドリンクがとりわけ著名で、その効用を歌う匿名のシャンソンも生まれた。一方でルイ・フェストーは、コレラに乗じて一儲けを企む人間を歌にする。これはヴィクトル・コンシデランも批判した、実際に効果がないものを「特効薬」と称した売り主を風刺するものである。

なお発表終盤でも紹介したが、本発表の参考文献や歌詞、音源等の一覧を下記のページにまとめている。紹介したシャンソンの歌詞は、いずれもインターネット上で閲覧可能である。

<https://researchmap.jp/hchihiro/sitographie202211>

【連絡事項】

シャンソン研究会は2022年12月1日に設立20周年を迎えます。4名の同志により細々と船出した研究会は、現在130名の会員を擁する立派な客船となりました。すでにお知らせしたとおり、20周年記念の論考集の出版を計画しており、来年度の科研の研究成果公開促進費に応募しています。結果は来年3月を待たねばなりません、採択されることを祈っております。

代表を務めている吉田は来年3月で定年を迎えますが、同僚の鈴木球子さんが参与を引き受けてくださいました。これまで通り、年1回は信州大学において研究会を開ければ幸いです。次回の研究会は、今のところ来春に関西のどこかの大学で対面式で開催することを検討しています。目途が立ちましたらお知らせします。

コンサートや講演会、著書等の案内など会員同志の情報交換として、「会員による情報発信」を随時行っています。詳細については研究誌末尾の「お知らせ」をご覧ください。